

平等觀個人主義(平民主義)と 差別觀個人主義(貴族主義)

藤井健治郎

個人主義といふは、原本的第一次的實在は個人であつて而してその個人は價値の創造者であり源泉である。個人はそれ自身の目的であつて、團體はその個人の方便としてのみ存在の理由を有つてゐるものであると主張する所の倫理上の主義をいふのである。此の意味の個人主義は個人は本來平等なものか、將た差別なものかの觀方の如何によつて、平等觀個人主義と差別觀個人主義との二つに別れる。然らば此の兩主義は如何なる主義であるか、その極めて平明な叙述をなさんとするのが、本論文の目的である。

先づ平等觀個人主義から述べやう。いふまでもなく、此の主義の根本立脚地は、人は自然的には皆平等なものである(*Omnes homines natura squales sunt*)といふ點にある。そこでその自然的平等とは如何なる意味か、又如何なる意味に於いてそれが妥當で

あるか。先づそれからして述べなければならぬ。

右の命題に於ける「自然」といふ名辭は、こゝに二様に解釋される。一つは(イ)生れたまゝといふ意味であつて一つは(ロ)本性といふ意味である。前者はカルチアされたの反對で、全くカルチアされずに、即ち人工を加へられずに生れたまゝの状態といふ意味である。先づ此の意味に於ける自然的平等といふことから吟味して見やう。是れにも色々の説がある。グロトシスなどは文化のない自然民族に於いては各個人は精神上に於いても身體上に於いても略同様であつて大差のないものであると極めて單純な自然的平等を説いてゐるし、ホッブスなどは生れながらの人間でも精神上、身體上多少の差異のあるのは事實であるが、しかしそれは人間を全體として見ずして部分的に見て比較するから甲乙の間に優劣等差の生ずるのである。然るに人々には長所もあれば短所もあり、優點もあれば劣點もあるそこで一部分に劣つてゐる所があつても他の部分の優つてゐる所を補ひ一部分に長所があつても他の部分の短所でそれを帳消にするといふ譯で人間を全體として見れば略同様のもので大差のあるものでない。それがカルチアを施すと異うやうになるといふのは外でもない。それによつて長所は益之を伸暢せしめ、短所は一層努力して之を發達せし

めるやうにする。そこでカルチアのあるとないと、十分なると不十分なるとに由て大變な差を起すやうになるのである。と論じてゐる。アダム・スミスやブルードン等はホッブスのこの言に裏書してゐる。アダム・スミスは偉い哲學者と、市中を徘徊してゐる荷物運搬者とを比較して見ると、殆んど同一の人間と思へぬ程に異つてゐる。が此兩人でも六七才頃までは略同様なものであつて、大した差異のあつたのではない。然るに其の頃から教育といふものが始まり、又進んでは職業といふものが始まり、爲めにその置かれる境遇と、受ける影響とが段々に異つて來る。そんなことから此兩人は今見るやうに異つて來たので、此の異ひは生れつきにあるのでなく、七八才以後の教育境遇感化にあるのであると説いてゐる。ブルードンも同様に人間の差異は社會の感化から來ること多く、生れながらの人間は大して異うものでないといふ説してゐる。

かういふのが自然の第一の意義に於ける自然的平等の諸説であるが、さて此の説を二吟味するには二つの點から行かなければならぬ。第一は事實の問題として、事實上自然の人々はさういふやうに等差の極めて少い者であるか否やといふ點、第二は價值の問題として、かうした意味の自然的平等は平等觀個人主義の立脚地とするの

價值ありや否や、更に進んでは一般人生問題の解釋の基礎として價值ありや否やといふ點である。先づ第一の事實問題として考察するに例へば同じ親から生れて略同じ境遇に置かれた兄弟でさへ身體上精神上可なり差異のあるものなることは周知の事實である。又野蠻人の間に於いても一部落の酋長と仰がれてゐるやうなもの、多くの場合に於いて他の一般の人々よりも何等かの點に於いて一頭地を抜いてゐるものが多い。だから生れたまゝのもでも文化の影響を受けないものでも矢張多少の差異のあるのは事實らしい。次に第二點の價值の問題に移つて考ふるに、たとひ文化の影響を受けない生れながらの人間は平等なものであるにした處が、それだから政治的にも經濟的にも倫理的にも平等であらねばならぬといふ理窟は立たぬ。何となれば吾等の關心する所の政治や、經濟や、道德は今日の文化制度としてのそれであつて自然民族のそれではない。だから自然民族の事實は(假りに事實であるとして)今日の政治や經濟を動かす理由とはならぬからである。又他方から考察して今日の所謂文化なるものは皆邪道へ踏み迷つたもので醜惡を極めた者である。だから今日の所謂文化なるものを一掃して自然の原に復してしまはねば、人生の眞價值を發揮すること出來ぬ。かやうに論ずればその論は老子の自然主義ルソ一の

自然主義となるのである。しかし老子やルソーの自然主義は、唯一時の病に處する薬品であつて、人生問題を決する所の常時の食料ではない。(此の義拙者主觀道德要旨に詳説しておいた。)

次に自然の第二の意義即ち本性といふ程の意味について吟味して見やう。この方からいへば人間の本性は皆平等なものであるといふ説になるのである。然らばその人間の本性とは如何なるものか、その點になると、人間の見方によつて二つに別れる。一つは唯物論の見方であつて、一つは理想論の見方である。唯物論の方から人間を観るとは如何なることかなれば、人間を動物の一種として観るといふことである。従て唯物論の見地から觀た人間の本性は何かといへば、動物の本性がそれであるといふことになる。然らば動物の本性は如何なるものかといへば、それは自己保存と種保存とである。而して自己保存を圖る欲求を食といふ語で表はし、種保存のそれを色といふ語で表はすとすれば、色と食とは動物の本性即ち人間の本性であるといふことになる。告子(孟子)が『色食は性なり』といつたのが、取りも直さず此の見地を表はしたものである。此の見地は生物進化論で道德を説明せんとした人々の多く取つて處の見地であつて、その重なる代表者は何といつても英吉利のハーバ

ト・スペンサーを推さざるを得ない。スペンサーは此の見解を地盤にして、彼の個人的快樂説といふ倫理説を説いたのである。スペンサーの倫理説は種々の倫理書で説明されてゐるから、こゝに之を詳説する必要ないが、しかし彼の倫理説を個人主義と見る理由は一應説明しなければならぬ。彼の出發點は何處にあるかといへば、凡そ人間の意思を動かす所の動機は快、不快の感情に外ならぬ。人間は快を求むるか不快を避けんかの爲めに働くものであつて、その快、不快の感情の外には人間の意思を動かす動機はない。かういふ心理的快樂説が彼の出發點である。而してそれから彼は快といふ感情は生活が進められた時の感情であり、反對に不快といふはそれが妨げられた時の感情であるとの心理説に進み、更に前進して生活は同類と固い強い團結をなすことによつて進められ、離群索居することによつて不安にせられ且妨げられるやうになるとの生物學説に入り、だから快樂を享樂し苦痛を避けんが爲めに、生活を旺盛にしなければならず、生活を旺盛ならしめんが爲めに團結を鞏固にしなければならぬと結論したのである。だから團結を鞏固にするのはそれ自身セルフ・ストレップの目的でなく、生活を進めんが爲めの方便に過ぎない、そしてその生活を進めるのもそれ自身の目的でなく、快を得、不快を避けるの方便に過ぎない。だから私を棄て、團

體の爲めに盡くすといふこと、それが道德の本質であるが、その道德はそれ自身の目的でなく、銘々の快を得不快を避ける方便に過ぎない。つまり「近接的目的は團體の繁榮隆昌であれども、究竟的目的は個々人の快樂である」(スペインサ「倫理學資料」)。かやうにスペインサ「の説は表面は團體主義であるが、その實相をいへば個人主義である。かやうに氏は倫理上に於いて實質的個人主義を取つたのみならず政治上に於いても亦個人主義的見地に立てゐたのである。スペインサ「に限らず一體英吉利の思想家は多く個人主義的見地に立て政治法律經濟宗教道德等の人間の事象を論じたものであつて、彼のベンザムの如きも直接の表面は一般的快樂説即ち所謂功利主義を立てたけれども、その功利主義なるものは個人の快樂を得る方便であつて、實際は個人快樂説に立脚してゐたのである。スペインサ「の如きもつまり此の英吉利の學風を現はしたに過ぎぬのである。

さて人間の本性は色食の動物性である^{フィチエラ}と見地から出立してた處の倫理觀が右のスペインサ「のそのやうになるのは自然の論理的歸結で避くることの出来ないものであるが、然らばさうした倫理觀は、凡そ倫理觀として正しいものであらうか。是れ吟味しなければならぬ點である。第一此の説の依て立てゐる所の快は人の欲す

る所、不快は人の避くる所であるから、それだから快は善であるといふ論は立たぬ。何となれば快は人之を欲し、不快は人之を嫌ふのは事實であるし、又常規の状態に於いては善は快を伴ひ、惡は不快を招くのが普通であるけれども、しかしすべての快が必ずしも善にあらず、すべての不快が必ずしも惡でない。それは日常經驗の事實から幾らでも之を證明することも出来るし、又吾等の常識の觀念に於いても善惡と快苦とは截然區別のある觀念として寫象せられてゐる。若し此の兩觀念を混同して快即善、善即快といふやうに考へたならば、道德上甚だしい不都合な結果を起すことになることは多く辯ずるを俟つまい。次に個體の生命の存續といふことについて考ふるに、個人が自己の生命をその十分な意味に於いて保存することは勿論、道德の旨叶ふた事柄である。しかしそれは如何なる場合に於いてもそうであるとはいはれない。時には自己の生命を棄てるのが却て道德的であるといふ場合もある。次に快は生命の存續及び増進に伴ふ感情であり、不快はその毀損及び減退に伴ふ感情であるといふ點であるが、此説からすれば、生物が進化して生命が愈増進すれば、快樂愈大となるといふことにならねばならぬ譯であるが、それは果して事實の上で證明し得ることであるか否や。是れは所謂生命の増進とは何ぞやといふその觀念の

如何にも依るのであるが、スベンサーの説いたやうに唯に幅と長さにと於いて増すことが生命の増進でなく深さに於いて増すこともそれであるとすると、生命の増進と快樂と必ず相伴ふや否や疑はしい。(此の點シュニアヘッド倫理學綱要に據る)。以上は唯三點だけについてスベンサー風の倫理學を批評したのであるが、是れだけ考へただけでもかやうな倫理説は倫理説として成り立ち難いものであることは明であると思ふ。

そこで次に理想論的見地から觀たる人間の本性は如何といふ點に移つて考察しやう。理想論からいへば理想は人間にのみ與へられた人間の專有物でなく世界一般に與へられた世界の共有物である。即ち世界そのものが理想的に構成されてゐるものである。しかしながらそのことを自覺して之を體認し、自己の努力によつて之を實現せんとするものは萬物の中で唯人間のみである。子思が「誠は天の道なり之を誠にする人の道なり」中庸といつたのもやはり以上の意味を現はしたのであらう。この意味に於いて人間は理想體であり又その理想實現の唯一の主體であるといつて可い。又その意味に於いて萬人は平等なものであるといふことが出來る。かういふのが理想論からの萬人平等觀である。

此の理想論からの萬人平等觀は更に分れて二つとなる一つは宗教的平等觀であつて、一つは倫理的平等觀である。先づ宗教的平等觀個人主義について述べやう。

宗教的平等觀個人主義の好代表者は基督教である。基督教は惟一神基督原罪及び救済の四根本的觀念から成立てゐる所の宗教であるといつて可い。右の内原罪を懷いてゐるものは各個人で、その各個人は皆神の子で、神の前に於いては、身分の高下も、財産の多寡も、智識の深淺も、何等の權威も、價値も有たぬもので、すべて人々は皆平等である。心の貧しきものは福であり、財産の多いものは却て天國に入り難く、バリスアの輩は終に邪道に踏み迷ふたものである。子その父に背き、女其母に背き、嫁その姑に背きてイエスを愛し、天國に近づけるを覺りて悔改めること出來ればそれですべて天國に入ること出来る。されば基督教は基督の仲介を通したる惟一神と個人との直接なる愛的關係をのみ力説する所の宗教である。だから基督教は猶太教の民族的宗教の桎梏を破つて世界教となり得たのである。加特利教及び教會組織は正しくこの根本思想を事實の上に體現したものとといへる。斷ておくは是は所謂原始基督教の根本思想から觀たのであつて、今の基督教の新教は固より加特利教でも餘程その趣を異にしてゐるのは事實である。

此の如く基督教は本來的には個人主義的思想を力説する宗教であつて今日の西洋文明に於ける個人主義的思想は此の基督教から來てゐること甚だ多い。基督教は個人主義的思想であるとして、そこで基督教者のうちでも迎合的態度を陋とし、敢て教祖の眞面目を發揮せんとする人は、その個人主義を宣言して憚らぬのである。イ・エス・エームスは是近二學年間に於いて爲せる大學說教集を公刊してゐるが、その卷頭に『高等個人主義』(The Higher Individualism)と題した一說教を載せてゐる。その説をいへば我が基督教は個人主義である。飽くまで個人主義である。それは聖典の何處からでも證據立てること出来るが、殊にパウロの手翰の中に最も鮮かに標幟されてある。しかし我が基督教は究竟力は正義であるといふ説に歸著する所の權力的個人主義でない、唯物論的個人主義でない、將た他に對しては無頓着であるか、若しくは進んで他を排擠し打仆してまでも自己を立て通さうとする個人主義でない、全く眞底から他と和衷協同し、そうしてその和衷協同に依てのみ各自特殊の職能を爲し義務を果たし、以て自己を充實すると共に一般社會を充實せしめんとする個人主義である。我等は『キリストの體にして亦ちのく其肢なり』哥林多前書一二章二七節とする『高尚なる個人主義』であるといふのがその趣意である。

以上宗教的平等的個人主義の代表として基督教のそれを概説したのであるが、是は前に提論した唯物論的見解などと異つて餘程取るべき點の多いことは首肯しなければならぬ。がしかしかうした立脚地から國家の存立や、對峙や競争や、戦争やが果して説明し得れるか否や頗る疑はしい。前に述べた加特利教の世界一國主義の如きは偶然に生れた思想でなく、基督教本來の思想に深い根ざしを有つてゐるものやうに思はれる。それゆゑ今度の世界の大戦亂の如きも基督教本來の赤裸々の立場から、果して満足に説明し得られるものであるか否や甚だ疑はしい。單に基督教といふ側から觀たならば、國と國とが對峙してゐることさへ理解しにくいことではあるまいか。況んや互に干戈を交へて個人としては何の恩怨もないものを戮し合ふといふことは如何に曲辯しても辯護することは難いであらう。今基督教國の交戦國の各が可成速く戦争が熄んで平和が克復するやうに、それには各自國が勝つやうに祈を獻ぜられた時に願はれる神は同一の神であるから敵味方孰れへひゐきすることもなりかねて、さぞ困られはしまいかと思はれる。その結果は自分の支配權を暫時停止して世界の形勢を觀望するといふことになりはしまいか。こんな事の結果になるといふのはつまり基督教で支配される下には唯一國のみあるべき筈

で國と國との對峙を許さないといふ理想に違背して現實には數國家が相對立してゐるといふ爲めであらう。又エームスの各個人が皆特殊のもので特殊の位置を占めて特殊の反應をするもので、複雑した社會生活の中に入つて益充實した個性を發揮することが出来るものであるといふ所謂『高尚なる個人主義』は、是は基督教に派つて適用せられ得る道理でなく、倫理の立場らでもいゝ得る道理である。

次には理想論的に觀た倫理的平等觀個人主義について述べやう。此の説は古代倫理學に於いてストア主義が既に之を唱道した。ストア主義はエピクテロス主義と同じやうに『本然の性に率て生活せよ』といふことを倫理の最高原理と立てた。

しかし何が本然の性であるかの觀方に於いては、エピクテロス主義のそれとは全然反對なものであつた。後者は感性を人間の本性なりとし、前者は理性をそれであると觀た。それ故にストア主義の人間の定義は、人間は理性的生類なりといふ事であつた。加之その理性なるものは管に人類の間に共通なものであるばかりでなく又萬物に亘つて普通なものである。世界は一理である。理外に物なく、又物外に理がない。森羅萬象は吾々人類と共に唯一理の顯現であつて、萬人萬物すべて同根より出でたものである。ストア主義にはこんな思想が含蓄されてゐるので、此の主義の

思想は汎神教的である。併し既に自ら象を具へ、體を持して個々の諸物諸象となつて表はれた以上は、その個々物は儼然たる獨立の個體で、あつて皆平等なものである。此の平等な個人が、いく人もいく人も相集團し、協同して社會的生活をなすに於いてはカテコンタなるものが必要の條件となつて來る。カテコンタとは、後世カント以後の倫理學に於いて説く所の本務とは同一のものでない。即ち多少カントの所謂性癖をも含んでゐるものであるが、先づ餘程それに近いものである。ストア主義が何故に此の概念を重要概念であるとしたかなれば、恐らく彼の平等觀から來たものであらう。何となれば差別觀は人と人との關係を權力關係なりと觀易く、平等觀は、權利關係なりとそれを觀る傾向になり易いからである。

かうしてストアの平等觀は、近世に於いてヒュー・グロウ・シャウ、デカルト、スピノーザ等によつて共鳴された。否そればかりでない、カントによつても、フヒテによつても同意された點である。その中でも最も嚴密な批判の上に最も嚴肅な平等觀個人主義を立てたのは謂ふまでもなくカントである。

カントは各個人は皆それ自の獨自の價值と不可侵の尊嚴とを具へてゐるもので、それ自身の目的であると觀た。然らば何故に然るかと問へば、カントはそれは人間

は「物」でなく「人格者」なるが故であると答へる。然らば謂ふ所の「人格者」とは如何なるものかと問へば何等後天的經驗的要素に依らず、全く先驗的に自分で法則を立て、そうして自分自らでその法則に率ひ得る意思を具へたもの、即ち自律的意識を具へたものである。そうしてその自律は必ず自由を豫想せざるべからざるが故に、自律の意思を具へたるものとは、やがて自由の意思を有するものといふことになるのである。如此先驗的意思又は純粹意思は理性の行的方面に働いたものであるが故に「人格者」とは、語を換へていへば行的理性を本具し、それに率て活動し得る生類であると答へる。此の意味に於いては萬人は皆平等の人格者であつて、それ自身の目的である。カントの平等觀個人主義は、種々微細の點に互つて主張されてゐるけれども、その要領は右に外ならない。

かう理想論的に見た平等觀個人主義は、エームスのいつたやうに他人との協同とも悖るものでなし、又ナイトやロイスのいつたやうに團體主義とも背くものでもない。此の點に關する詳しい議論は、別の機會に譲るとして、こゝでは唯、ストア學徒の説や、カントの論にまだ多少考察すべき點の残つてゐることだけを見て見やう。

ストア學派は希臘から羅馬かけて長い歲月に亙つて持續した學派であるだけに、

その中には種々の學者が出て種々な説を立てゝゐるから、一口に是がストア學派の説と押しなべていふことは困難であるが、彼等が政治的團體に關しては多くは世界一國主義ワンナツヨクニシを主張してゐるやうである。そうしてそれは實際に於いては當時の世界統一國家の體をなしてゐた羅馬帝國の統一に甚だ都合宜い影響を與へた。この世界一國主義は政治團體の主義として種々の不都合なる點を有つてゐることは既に前にも述べた通りである。

カントは權威ある倫理的平等觀個人主義を確立してそしてその倫理觀平等觀個人主義は團體の成立と何等相格杆するものでないことを論じてゐる。カントは自己目的である所の「人格者は必ず相集つて團體を形成する。その團體は自己目的たる人格者の團體なるが故にカントは之を『目的(複數に用ふ)の王國』と名づけてゐる。而してその團體生活内に於ける倫理上の原則は『爾の行爲の格率マキシムが團體の生活に不都合ないやうに行へ』といふのである。是は行的理性が先驗的に自ら打ち立てた倫理上の『無上命法』の第三の形であつて『爾の行爲の格率か一般の人人の行爲の原則として差支ないやうに行へ』といふ第一の形の『無上命法』を言ひ直して表はしたものである。此の點からいへばカントの個人主義は決して他人との協同生活と相容れる

ことの出来ない性質たぢのものでないことは明かである。かういふ譯ではあるが、しかしカントの『目的の王國』でもまだ個人主義的色彩を帶んでゐて、團體主義的思想と十分に調和したものはいへない。即ち獨立の各個人が協同生活をなすこと出来ぬものではないといふだけで、團體その者と個人との關係は解けてゐない。

最後に差別觀個人主義について述べて見やう。差別觀個人主義とは、私は個人は本來的に平等なものでなく、賢不肖、能不能、大小、強弱始めから異つてゐるものである。人類の文明と、その文明價值とは、賢なるもの、能なるもの、大なるもの、強なるものの創造した處であつて、彼等は人類の恩人であり、同時に救主である。それだけ彼等は政治に於いても、經濟に於いても、學問に於いても、文藝に於いても、宗教に於いても、道德に於いても、すべて特殊の權力を享有すべき筈のものであつて、不肖不能、小弱なるものは、唯黙して、彼等に服従し、彼等の創造した文明と價值とをそのまゝに受け納るべき筈のものである。そこに正義もあれば、均衡もあり、公平もある。かやうな主張をする所の説なりと理解してゐる。かやうな説であるから、此の説は一種の天才渴仰論であり、英雄崇拜論である。

佛蘭西革命は社會上、國家上のあらゆる差別階級を打破せんとした革命であるこ

とは言ふまでもない。しかし此の佛蘭西革命は偶然な突發事件でなく近世の初めから西歐の天地に蘊釀された平民的精神、平等的精神が、馬車馬的なる而して又可燃性に富んでゐる佛蘭西國民の精神の沈設水雷の中に入つて、表はれた現表である。近世の文明とは高きを低くし、長きを短くして、すべてを平均にしやうとする文明であつた。便利な交通機關は老人でも女でも子供でも、壯者強者と同様に、遠い處でも、高い處でも旅行させること出来る文明であつた。選舉權といふものは、目に一丁字ないその所有者にも候補者の叩頭を得しめるやうになつた。教育の自由は、能不能も問はず、後先きの考もなく、誰をも彼をも高等の學校の門内へ流し込む理由となつた。又生活の自由は金錢に物をいはしめることになつて、金さへあれば、どんな價値の少い人間でも、物質的には王侯の生活をなすといふやうになつた。つまり近世の初めから起つて來た平民文明の精神は、かうしたものであつて、その水雷が爆發して、恐しい水柱を揚げたのが佛蘭西革命であつた。

此の佛蘭西革命の爆發によつて、染じみと平民文明、即ち平凡文明に墜きその弱點を洞察した十九世紀は、夙くも天才渴仰、英雄崇拜の聲を擧げたのである。英國の文明批判家トーマス・カーライルの如きは、その急先鋒を承つた人である。

一千八百二十年代の初めに始まつたカーライルの文學的活動は一千八百四十年代には漸次その圓熟の境に達した。その期の代表的作物は『英雄崇拜論』Heroes and Hero-Worship(1841)と『サーター・レーザータス』Sotta Resartus)とて、共に浪漫主義の思想と氣合とに充ち満ちたものである。世界史はその根柢をいへば英雄の歴史である。吾等が享樂してゐる一切の文化は、偉人の腦裏に思ひ浮べられたる思想の外的表現に外ならぬ。偉人は世界史の創造者であり、人類の指導者である。世の凡人等は一にその指導に従ひ、その指揮に従て、彼等に隨いて歩いて歩いて歩んでゐさへすれば宜い。英雄偉人は權威あるものとして此の世に現はれ出でたものである(英雄崇拜論)。是がカーライルの英雄觀であり、平等打破凡俗退治の論である。

かうした見解は十九世紀の中葉に至つて生物學上から大なる援助を得ることゝなつた。それはダーキンの創説した生物進化論である。いふまでもなく生物進化論は英雄崇拜論を確立せんが爲めに考察されたものでない。が英雄崇拜論者乃至英雄特權論者は取つて以て自家藥籠中のものとなしたのである。ダーキンの進化論とは生物は自然的及性的淘汰の作用によつて、最適者が段々後まで存續するといふ説である。『種の起源』及『人數の起源』。此の進化論を取つて所謂進化論的倫理學

を建設した最初の人はハーバート・スペンサー『倫理學原理』でそれを完成したのは
 レスリー・ステュヴン『倫理科學』である。さりながら此等の人々の建設した倫理學は
 平民的のものであつて、貴族的のものでなかつた。が、しかし生物の種からいへば勿
 論、同一種内の個々の生類からいつても、最適者が漸次後まで存続するといふ側から
 いへば、それは平民的でなく、却て貴族的であるといはねばならぬ。ダーキンの進化
 論の中にはかういふ思想もたしかに含まれてゐる。それにも拘はずスペンサーや
 ステュヴンがその基礎の上に倫理學を立てた時には、躊躇なしに平民的のものにし
 てしまつて貴族的のものとしなかつた。しかし生物進化の事實中には、たしかに貴
 族主義の道理が含まれてゐるのであるから、その點を基礎として倫理學を建設すれ
 ば、その倫理學は當然貴族主義のものとなる筈である。エルンスト・ヘッケルが獨逸の
 社會民主黨に對して、ペーベル始め社會民主黨の指導者達は進化論の基礎の上に彼
 等の理論を建設すること出來たやうに説いてゐるが、それは大なる間違で、進化論は
 平民的のものであるよりは、むしろ貴族的のものである。だから社會民主黨のやう
 に、民衆の爲めに都合のよくなるやうにといふ理論は進化論からは生れて來ぬ筈で
 あると評したのは、(Welkanschung des neuen Kurses 1892) 確しかに半面の眞理を具へてゐ

る言である。

そこで此の半面の眞理を基礎として徹底的な貴族主義を立てたものが表はれる事になつた。それはニーチエである。ニーチエは人間の實相は自己の權力を擴大せんとするにある。哲學者の中には「活きんの意思」が人間の實相であると説いた人もあるけれども(ジューペンハウエル)それは形式論であつて、まだ人生の内容までをも窮めた説といふこと出来ぬ。人間に「活きんの意思」あるのは事實であるけれども、しかし人間は唯單に「活きん」が爲めに「活きる」のでなく、何か或る目的の爲めに「活きん」とするのである。然らばその目的は何かといへば、それには種々な説があるが、其等の説は一も感服すべきものでない、自分はその目的は權力を得んとするにある、即ち權力を得んとするが人生の唯一の内容であると思ふ。即ち人間の實相は「活きんの意思」(Wille zum Leben)にあるといふこと、それから「權力を得んの意思」(Wille zur Macht)にあるといふことへ言直して來なければならぬ。此の權力を得んの意思を有する萬人が銘々自己の目的を實現せんと競争する。その競争で強いもの、大なるものは、弱いもの小なるものを打ち仆して自己の目的を達する。かくして強大なる人は段々自己の目的を果して進んで行く。その進んでゆくうちに、愈強大なるものが卓越して、他の弱

小なるものを駕御することゝなる。そうした手續を繰返してゆけばゆくほど愈偉人が世の中に表はれ来る。それが人間の進化といふもので、その中から一切の文化が胚胎して來た。而して萬人の上に坐してそれ等の人を驅使してゆく人はニイチェは之を「超人」と名つけてゐる。此の「超人」が他を壓倒して自己を表現して行くは、進歩を可能ならしめる唯一の道であつて、それがやがて道德である。博愛とか、慈善とかいふものは、弱小なるものをも強大なるものと共に活かしてゆかうとするものであつて、従て人間の進歩を阻害するものであるから、それは不道德の最も甚だしいものである。從來是等を重大なる徳義なりとしたのは、(基督教)甚しい謬見である。凡そ此の世に於いて善といはるゝものは強ばかりであつて、惡といはるゝものは弱ばかりである。人間の實相はかうしたものであるのに、それを平等のものと觀、平等の權利を認めんとするが如きは謬見の甚しいものである。かういふ意見を立てたのである。此の意味からすれば、人間は政治的にも經濟的にも社會的にも宗教的にも道德的にもすべて不平等なるが當然であつて平等なるが誤であるといふことになるのである。

右のニイチェの思想とカールライルのそれとを結び付けたやうの思想はマロックの『貴

族主義と進化』(一八九八)である。

マロックは近頃の社會學の研究法に根本的誤謬である。それは近頃の社會學者等(ベンジャミン・キッド、及びスペンサー)が、社會の事情を説明するのに、「只だの人」(平凡な一般の俗衆といふもの)のみを眼中に置き、偉人を其俗衆の群團の中に敲き込んで了つて、彼等の社會に於ける効果を認めず、而してその「只だの人」を動かす所の根本的の動力は彼等の自然の性質と、彼等を圍繞してゐる環界とあるを見ることである。それが爲めに彼等は唯群團の全のみを觀て、その全の中の部分を觀ない。而して社會の進歩はその全の中の部分の衝突、競争から起るものであるのに、彼等は全ばかり觀て、部分を觀ぬから、社會進歩の實相を究めること出来ない。然らばその部分の衝突、競争は如何にかして起るなれば、人々に賢不肖、能不能の差別あるからである。社會の進歩は人を支配し、命令することの出来る少數人の力によつてされるものである。「偉人」といふは必ずしも、英雄たるを要せぬ。多數の人々よりも社會に或る効果を比較的多く貢獻する人でありさへすれば可い。(それ故に此の點に於いてはマロックはカライルとその見解を異にしてゐる。而してそれは彼偉身そのことを述べてカライルの説を批評してゐる。)それであるから、所謂偉人は種々の性質から成るも

のであつて單純なものでない。最適者の存續をいふ説は、その最適者が段々後まで存續して人類の進化、社會の進歩を促してゆくといふ説であるから、一種の「偉人説」である譯なるが、自分の「偉人説」はそれだけで満足しない、その最適者が長い歳月で徐々にやることを、短期間に急卒にやつてしまふ「偉人」が存在してゐるし、又必要であることを主張するものである。是が「マロク」の「偉人説」の梗概である。

彼はかうした社會學上の貴族主義を今日の社會問題、勞働問題に應用して、今日勞働者が資本家に對して、汝等獨で利益を壟斷する勿れ、獨占する勿れ、必ず我等にも之を頒與せよといふは全く理由のないことであると論じて、大に資本家の肩を持つてゐる。(Critical Examination of Localism)。

さてかうした差別觀個人主義は幾何程の眞理の内容を有つてゐるのであらうか。第一に人は自然的には皆不平等なものであるといふ前提からは、必ず「ニーチェ」の差別觀個人主義が生れて來なければならぬか、先づそれからしてが疑問である。それは同じ前提から出發して、以上とは全く異つた結論へ進んだ所の研究もあるからである。ベンジャミン・キッドや、エドマンド・ケリーなどの結論はそれでなる。キッドは自然的には人間は不平等なものであるから、之を其の儘に放任しておけば、必ず弱肉強食の

結果とならざるを得ない。しかし是では社會は騷亂して、人は一日でも安らかな生活を送ること出來ず、道德などは立たう筈はない。とはいへその事は生物進化の事實から來た平明な道理の認める處であるから、若したゞ道理だけが人生を支配する唯一の原動力であるならば、道德なるものはどうしても立つこと出來る筈がない。そこで此の社會を平和にし、強も無暗にその強を振廻さず、弱も安全に生活すること出來るのには、道理以外更に一つの人生を支配する力あるを知らねばならぬ。それは外でもない超自然の制裁である。換言すれば道理以外之に宗教的制裁なるものがあるの、吾人の道德は可能となるのである(社會進化論)。かやうに論じてゐる。又ケリーは、自然的には不平等な人間は、政治や法律の方法で可成平等なものとせられ、而して後に競争するのである。かうした競争が人間の競争である。たとへば所有權といふものは、國家が之を認め、之を保障してゐてくれるものであるから、智あるも、智なきも、強さも、弱さも、等しく安全にその權利を享有してゐること出來る。そうした上で人間は競争するのであるから、人間の競争と、動物間のそれとは性質を異にしてゐるものである。そうして所謂正義とか人道とかは、自然的の不平等を人為的の平等にした處にあるものである(人間の進化)。かく論じてゐる。

しかしキッドのいふ宗教やケリーの説く所の政治法律やたけでは論がまだ途中にあるもので、そこに猶問題が残つてゐるやうに思はれる。それはその宗教や政治や法律やは人間以外のものから人間に與へられたものであるか、若しくは人間の本性が自然に之を作り出したものかといふ問題である。若し前者だとすれば、人間は他から與へられたものを、生物的生存競争を緩和する道具として偶然之を用ゐたといふことになるし、それに反して若し後者だとすると、その生物的生存競争は人間社會の實相でなく、人間の競争は生物的生存競争とはその性質を異にしてゐるものであるといふことになる。然るに以上二肢の内、孰れが眞理であるかといへば後肢である。即ち宗教や政治や法律やは人間の理想が之を作り出したもので、人間以外のものから自然に與へられたものでない。人間の理想が其の置かるゝ四圍の状況に應じて自己を實現したのが宗教でもあり、政治でもあり、法律でもある。而して道德といふものも亦その内容からいへば、やはり右の通りのものであるから、道德はその本質に於いて宗教政治法律等に相關係してゐるものである。若し果してかういふものならば人間の競争は單純な生物的生存競争でなくして、世界觀又は理想の競争 (Kampf um die Weltanschauung oder Kampf ums Ideals) であると謂はざるを得ないことにな

る。此の點からいへば人間の實相は「權力を得ん」の意思にあるとするのは未だ徹底したる論といふこと出來ぬ。何となれば所謂權力も人間に對する性質は、富や名譽やと同じことで、人間の欲求する對象數多あるが中の一つに過ぎない。だから又富や名譽やと同じく、何人でも凡そ人たらん程のものは、道理上必ず之を欲求しなければならぬといふ性質のものでなく、欲求するも可、欲求せざるも亦不可なしといふことになる。從て權力は自己目的セルフ・ポスト・ジブでない。自己目的でないから、こゝに權力を欲する人があれば、その人に向つて何の爲に權力を求めるとか、反問すること出來る筈である。而してその問答の結果は理想の競争、人生觀の競争となるのである。

次に差別觀個人主義はカトライルヤ、マロク等が明々地に唱へたやうに、つまり『偉人史觀』に歸結する。換言すれば歴史は偉人の作つたもので、世界歴史は詮ずる所偉人の傳紀に過ぎぬといふことに歸着する。此の『偉人史觀』に反對するブールドー (Bourdieu, L' Histoire e les Historiens, 1888) の論の如きも一方の極端説ではあるが、しかし『偉人史觀』といふ歴史觀の缺點あることだけは承認せざるを得ない。『偉人史觀』はすべてが偉人の作り出したやうに説くのであつて、その偉人の立てゝゐた土壤の性質や、その呼吸してゐた零圍氣をばさつぱり眼中に置かない説である。四周の境

遇、過去の歴史、將來の見込等は偉人をして偉人たらしめた必要條件である。即ち當時のミリュエのことを釋ぬることなしに、偉人の眞面目を發揮すること出來ぬ。だから偉人のみが歴史を作つたやうに説くのは謬である。

次に貴族主義はつまり『強いもの勝ち』といふ主義になる。所謂『力は正義なり』といふ論になる。是も亦謬である。

(右は或る處に於いて一般の聽衆に向て講義した草稿で、至て平凡なものである。固より研究の代物でない。が所謂『普及』の目的には副ふならんとしてかくは物した。